

(様式2)

令和7年度 自己評価書および学校関係者評価書

令和8年3月16日

1 本年度の重点目標

1. 「学ぶ力」の育成を図る課題探究的な学習やさっぽろっ子自治的な活動の充実
2. 子どもに自分を大切に思う自尊感情や自他の生命を大切にする指導の徹底
3. 子ども一人一人のニーズに応じた支援や教育の充実

2 本年度の経営方針

生徒一人一人が「自分が大切にされている」と実感できる学校づくり

1. 現行学習指導要領を踏まえた教育活動の充実を図る
2. 小中一貫した教育を踏まえたパートナー校との連携
3. ICTを活用した教育の推進
4. 挨拶・言葉遣い・思いやりの心の重視
5. 特別支援教育、不登校支援の充実など、一人一人のニーズにあった支援の推進
6. 信頼される学校の創造
7. 学校おける働き方改革の推進

3 自己評価結果

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方向	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
重点目標	生徒が「失敗を恐れずに様々なことに挑戦できる」環境を整えることができたか。	A	北野台フェスティバルやスポーツ DAY、職業体験を通して、生徒が自発的に活動する場面が多くみられるようになってきた。また、コロナ以降の教育課程が整理されてきたため、年間の流れを考えた指導がしやすくなったことが教職員の数値の増加につながったと考えられる。今後も、「失敗を恐れずに挑戦できる」場面を増やし、自分らしく生活できるような環境づくりに努めていく。	A	A
	子どもたちのよさを認め、自己肯定感を高めることができたか。	A	期末懇談等で保護者と教員が連携を取り、生徒のよさを共有する機会や、学校開放日や PTA 役員の行事見学など、保護者が生徒の活動を参観する場面が増えたことが保護者の数値が上昇したと考えられる。今後も、生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、保護者には生徒の活動の様子がみられるように、授業参観などの機会を増やしていく。	A	A
学校関係者評価委員による意見		保護者が中学校に足を運ぶ機会は、小学校より減る傾向にある。授業参観やPTAの活動などを通して、開かれた学校づくりに向けて努力している。今後は、コミュニティ・スクールが始まるので、体育的行事や合唱部のコンサートなどを地域展開していくことで、子どもの学びを保護者、教員、地域からサポートしてほしい。			
学習指導	指導の工夫により「わかる、できる、楽しい授業」を確立することができたか。	A	札教研や校内研修会の討議を通して、AAR サイクルを意識するなど、生徒が活動しやすい授業構成について、力を入れて取り組むことができた。今後は、生徒にとって「分かった」や「できた」がより実感できる授業展開や学習評価となるように、研鑽を積み重ねていく。	A	A
	授業において生徒が見通しをもって、主体的に取り組めるような課題の設定ができたか。	A	各教科で、校内研修会を生かして、単元ごとに授業や評価の計画を提示することができた。また、前期後期制の移行が浸透してきたことが、生徒・保護者の評価「A」につながっていると考えられる。今後も見通しをもった授業を展開できるように努めていく。	A	A
学校関係者評価委員による意見		校内研修会や札教研などを通して、評価の取り方について学習していることがわかった。また、生徒が見通しをもって取り組めるように、単元ごとに目標を伝えるなどの工夫を行っている。今後も、保護者に生徒の学習状況が伝わるような取り組みを継続していただきたい。			

生徒指導	生徒が安心して学習し、生活できる学校・学年・学級づくりを推し進めることができたか。	A	定期的に行った教育相談やシャボテンログ・いじめアンケート後の相談など、生徒に寄り添った取り組みが、評価3.5前後の「A」につながったと考えられる。今後も落ち着いた学習環境を保つために、基本的な生活習慣を定着させることなどを大切にして、学級・学年経営に努めていく。	A	A
	あいさつ、身だしなみ、時間を守ることを意識した生活を身に付けさせることができたか。	A	時間については、評価は「A」であったが、遅刻または時間ぎりぎりに登校して来る生徒も少なからずいるため、ノーチャイムの意義なども含めて時間への意識を高められるような取り組みを続けていく。また、あいさつや身だしなみについては、生徒の学校評価アンケートの中からも意識の高さが伺えたが、一部生徒はブレザーを着てこないなど正装について根気よく伝えていく必要がある。	A	A
学校関係者評価委員による意見		いじめやトラブルなどがあつたときに、学校が生徒に寄り添って対応していることが、「A」評価につながっていると感じた。あいさつについて、学校内で元気よくあいさつをしてくれるが、学校外ですれ違った際にあいさつが少ない。小・中と校区が同じということもあるので、地域の方とのあいさつを通して、社会性を学んでほしい。			
その他	教育活動の様々な場面で、1人1台端末（Chromebook）を学習ツールとして活用することができたか。	B	授業はもちろん、委員会・局会などの生徒会活動にもchromebookを利用していることが、生徒評価が向上している要因と考えられる。教職員については、効果的に使用している教科が増えてきている一方、使用していない教科もあり評価が「B」となっている。今後は、使用する回数を増やすことに力を入れるのではなく、効果的に活用する方法を検討していく。	A	A
	9年間を通した子どもの学びの視点から、小学校と連携した取組を深めることができたか。	B	生徒のアンケート結果から学年が上がるにつれて、小学校との関連が薄れているため、数値が若干低くなっている。昨年度から2月に、中学生から小学6年生に中学校説明をする活動を実施したり、春の札教研での授業交流をしたりする活動を通して、少しずつ数値が上昇している。今後は、札教研での小中合同研修や行事の見学を増やすなどして、9年間を見通した学びの意識を向上させたい。	A	A
学校関係者評価委員による意見		chromebook の活用については、生徒が総合的な学習の時間にスライドを作ったり、音楽の授業で曲の編集をしたり、していることがわかった。教員も校内研修会などで研鑽している様子が伝わった。小中連携では、中学生が小学生に学校説明をするなどしている取り組みは素晴らしく、温かい学校になってほしいという気持ちが伝わった。今後は、小学校と中学校だけでなく地域の含め、9年間を見通した教育課程を編成していただきたい。			